

風はPLCから

令和5年4月、鹿兒島大学教職大学院7期生(以下「M1」)が入学しました。

現職教員8人、ストレートマスター(学部新卒:以下「ストマス」)12人の計20人でスタートしました。入学して半年が経過し、教職大学院の生活にも少しずつ慣れてきました。

この教職大学院通信は、全3回発行することを計画しています。第1号では、私たちM1が、なぜ進学しようと思ったのか、前期の講義の様子等を紹介したいと思います。教職大学院に興味がある方はぜひ参考にしてください。

【PLC→Professional Learning Communityの略】

～ ストマスの声 ～

私が教職大学院への進学を決めたのは、実習の評価授業で自身の知識不足や授業づくりの魅力を実感したことがきっかけです。教職大学院の講義や実習の形態は、学部時代とは大きく異なります。特色としては、グループ討議中心の講義、実習校の公開研究会への参加、実習校の協力の下での検証授業の実践などが挙げられます。これらの学びを通して、授業づくりのみならず学校の組織的業務にかかる事の理解も深めていくことができます。

今後は「子どもの創造性をのばす図画工作科の授業デザイン」について探究していきたいです。



私が教職大学院への進学を決めたのは、実習での評価授業で課題が多く残ったこととともに、わかりやすい授業を実践できる教師を目指したいという思いがあったからです。また、学校全般(生徒指導、教育相談、学級経営等)について、さらに学びを深めていきたいと思ったことがきっかけです。

教職大学院では、学部の時とは大きく異なりグループ討論が中心の授業形態が多く、様々な考え方にふれることができ、日々刺激を受けています。

実習では、授業参観や実習校の公開研究への参加、さらに、先生方にご協力いただき検証授業を実践させていただきました。これらの学びを通して、授業づくりだけではなく、組織的な業務についてもより深く学ぶことができました。

後期は、複式学級の実習、特別支援学校での実習等、貴重な実習の機会をいただいています。それぞれの実習の中で、学びを深めていき、今後活かしていきたいと思っています。

大学では法律を学びながら中高社会科の免許を取得しました。私が教職大学院へ進学を決めたのは、卒業後さらに教育について専門的に学びながら、小学校免許を取得したいと思ったからです。

教職大学院(小免プログラム)では、教育学部と教職大学院の講義を受講し、教職大学院で学んだ理論や実践からの学びと学部科目での学びをつなげることができます。また、3年間という期間は、多くの院生と接することができる強みもあります。

後期では、重点領域実習にて小学校での実習があるので多くのことを学び、実践につなげていきたいです。

～ 現職の声 ～

教職13年目を迎え、3校を経験してきました。現場で働く中で、不登校児への対応や保護者との関わり方について、もっと深く学びたいと思い入学しました。

毎日の講義は、グループディスカッションが中心でした。専門性の異なる大学院生同士、様々な角度から意見を交わし、新しい「観」に触れる機会を多く得ることができました。また、講義や実習に参加する中で、新しい知見を得ることができ、当初設定した、自分の探究課題についても、変化が見られました。

後期は初めて6限の講義を受講するので、タイムマネジメント力を高めながら探究課題の解決に繋がる学びを深めたいです。

現場で「知識の再生産」ばかりしている自分に疑問を感じ、もっと学びたいという思いから教職大学院に進学することを決めました。

教職大学院の講義をとおして、「学び」そのものを問い直すキッカケをもらっています。入学当初は、「教えられない」状況に戸惑うことがありました。しかし、今では、院生同士で語ったり、文献を読んだりして、「観」を問い直すことの大切さが分かってきたように感じます。「教えられない」ことが「学び」につながっていくとは全く思いもしませんでした。

今後は探究課題を決定し、一層深めていくこととなります。教職大学院の先生方、院生の力を借りながら、よりよい探究になるようにしたいです。



教員として10年足らず経験してきました。日々の業務の中で、なかなか突破できない壁に突き当たる場面が多くなってきたこともあり、新たな学びを得るべく入学することにしました。

自分の教科である保健体育科指導法の省察や、高度化実践実習Iを通してこれまでの実践を振り返りながら、不足していた知識を加えたり、様々な授業参観を通して理論に基づいた実践の様子を見たりして、来年度の自分の姿を思い描いています。

後期(残り半年)は、1日1日を大切に、自分の学びたいことをより深く掘り下げていけるようにしていこうと思っています。

